

乳幼児から学齢期の発達支援と特性

（発達支援のポイント）

1

平成25年度
第2回 児童発達支援研修会

「発達」を支援するということ



「発達」とはこどもが学び成長する段階です！

- * 障害特性のみにとらわれず
- * 行動のみを変容させることなく
- * その背景にある発達要求を知る

発達の領域 = 運動・理解・言語・
社会性・対人・生活習慣

「発達をみる」とは、対象に正確に焦点を合わせる営みともいえよう。

さらにファインダー(あなたの眼)から見える子どもはあなた次第で変化する。

「発達を学ぶ」ことによって、あなたの眼は豊かになり子どもは新たに発見される。

そしてあなたは子どもだったのだから、こどもの発見とはあなた自身の発達過程の発見(過去から現在そして将来にわたる発達過程の発見)となる。

乳幼児期の発達支援の特徴と基本視点

○障害が確定する前からの支援

発達支援は、障害が確定する前からの気づきとなる段階(早期発見)からの支援である。

○支援は育児支援と発達支援の両方の要素をもつ

特に、乳幼児期は長いライフステージの最初の時期であり、かつ発達の可塑性に富んだ敏感で変化する時期である。そのため、支援内容は子どもの育ちをベースとした子育て支援と発達特性に対応した専門的な支援が中心になる。

○親の心情や背景を配慮した支援を行う

発達支援は、親子にとって身近な地域で、敷居の低い場所(機関)で行うことが原則である。そのため、個別での対応を重視したり、プライバシーを尊重した配慮が必要である。

○発達支援の対象は、障害児と親・きょうだいである

発達支援では、親や家族を協同パートナー及び理解者として支援を行う。同時に、親に対しては、子育てを行う親の心理的変化に応じた支援や相談、福祉サービス等の提供、きょうだいへの心理的な支援が大切である。



○地域でのネットワーク支援を充実する

乳幼児期における障害児と家族は、地域の色々な機関を利用している。そのため、各関係機関(保健・医療・療育・保育・教育・福祉・自立支援協議会等)の縦や横のつながり(連携・協力・相互理解)が大切である。

こどもの様子を知るために

アセスメント

= 基本的な発達をベースにして、その子
その子の特性を知る

① 発達検査

② 聞き取り

こどもの育ちと保護者の思いを受け止める

* 妊娠中や出産時の状況把握

* 家庭の環境

* こどもの健康状態・既往歴

③ 観察

日常的な行動の様子

発達の姿を知る ～「〇〇ができる できない」に着目
するのではなく「今何をしたいと
思っているか。何に興味や関心が向
いているか」という目線に立って
“こども”を捉えることが必要。

ポイント

- ①あそびの様子から
- ②生活の様子から
- ③人との関係のとり方から
- ④身体の使い方から
- ⑤子育ての中で困難と感じるところ
(母親のききとりから)

愛着形成 と 発達

7

乳幼児期の愛着形成

愛着形成の育ちに必要な条件

- *この人はじぶんの要求や感情や意志を理解してくれる特定の人が存在。
- *この人（ここでは、母親）に守られているという身体的・精神的安心感。

形成時期
期間

生後6～8カ月頃
約5～6カ月間



☆見知らぬ他者への人見知りと母親や親密な人への後追いという形で表れることが多い

障害児の愛着形成の特徴

乳幼児期では

- 障害のあるお子さんは、愛着形成に時間がかかる。
- 母親を道具のように扱ったり、母親がいなくても平気だったりする。

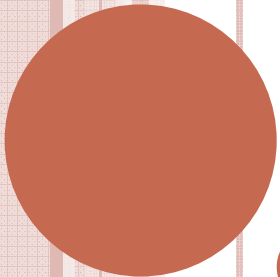
重要！

愛着形成は、子どもの発達にとって非常に重要です。“五感を豊かに働かせられる遊び”の提供とともに、大人と一緒に遊ぶことを増やし共感を生むことで、愛着形成を促します。

愛着形成が進むと

- 母親がいない事が不安になります。
- 母親に誉められることをまたやろうとする気持ちが芽生えてきます。





学齡期のこどもたち

学童期の特徴と支援

学童期の発達の様

幼児期の
信頼関係



自発性
積極性
目的性



ものを成し遂げる



不安もいっぱい

できる？
できない？

ほめてもらえた！
認められた！



自己肯定感

自尊心

生産性の感覚

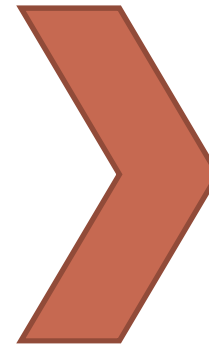
放課後デイサービスの役割について

大人になるまでのとても大切な時期

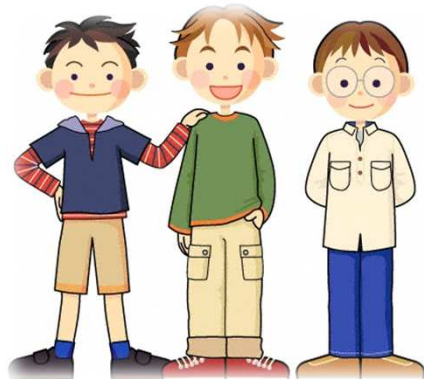
取り柄

+

☆成し遂げるよろこび
☆友達・大人に褒めて
もらうよろこび



劣等感



ポイント！

- ☆孤立をふせぐ
- ☆仲間の存在
- ☆充実した活動



大切な“あなた”というメッセージの発信

こどもの特性と支援のポイント

○障害児の特性

- ・「世界」は安心できない、不安がいっぱい
- ・ 分かりたいのに、分からない
- ・ 遊びたいのに、遊べない
- ・ 動きたいのに、動けない
- ・ 伝えたいのに、伝えられない
- ・ ... この辛さを分かってもらえない

特性に応じた支援

- ・発達の方の偏り(凸凹)
- ・混乱や不安と不自由さをもつ

○障害児の養育における親(養育者)の負担とリスク

- | | | |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 育てにくさ・ 関わりにくさ・ 理解のしにくさ・ 行動の問題への心配・ 将来への心配 | ➔ | <ul style="list-style-type: none">・ 子育ての辛さと負担感をもつ・ 子育ての達成感と喜びの少なさ・ 障害の認め難さ・ 親としての自信の喪失・ 適切に関わる回数減少 |
|---|---|--|

親は不安と混乱が長期間続く ➔ 親の心理的特性に応じた対応

知的なおくれのあるこどもの支援

特徴・・・乳幼児期の発達がゆっくり

- ①知能検査や発達検査で表されるIQやDQが、
平均よりも低いこと
- ②社会適応が年齢よりも遅れている状態



同じ年令の集団で同じ勉強や活動をする
ことが難しいこともある。

ポイント

「苦手」なことと「得意」なことを見つける

たとえば・・・

お金を計算したり、時間をはかったりする

ことばや文章を理解する

ことばで表現したり
文章で表現する

相手の行動を見て自分を
守ったり、備えたりする

学校の勉強を理解する

にがて

でも・・・



音楽や絵画などの活動ではとても集中できる

人との関わりが好きで、マネなどが上手

感情の表現が豊かでユーモアがある

一度興味を持つと、生涯とおしての趣味となる

とくい

注意点～知的障害が軽度な場合、支援が必要であることが見過ごされる事があります

そのため…

緊張状態

依存的

否定的な自己評価

仲間はずれ

逸脱・衝動的

ということにならないように…

適切な支援

- ☆発達年齢
- ☆達成感
- ☆楽しい経験
- ☆ほめられる経験

「わたし」
らしいって
ステキ！

あなたにはステキな
ところがたくさんあ
るよ！

自閉傾向のあるこどもの支援

3つの特徴

対人交渉の質的な困難さ

人と上手に付き合えない

コミュニケーションがうまくいかない

コミュニケーションの質的な困難さ

想像力に困難さがあるために、こだわりがある

イマジネーションの障害

ポイント!

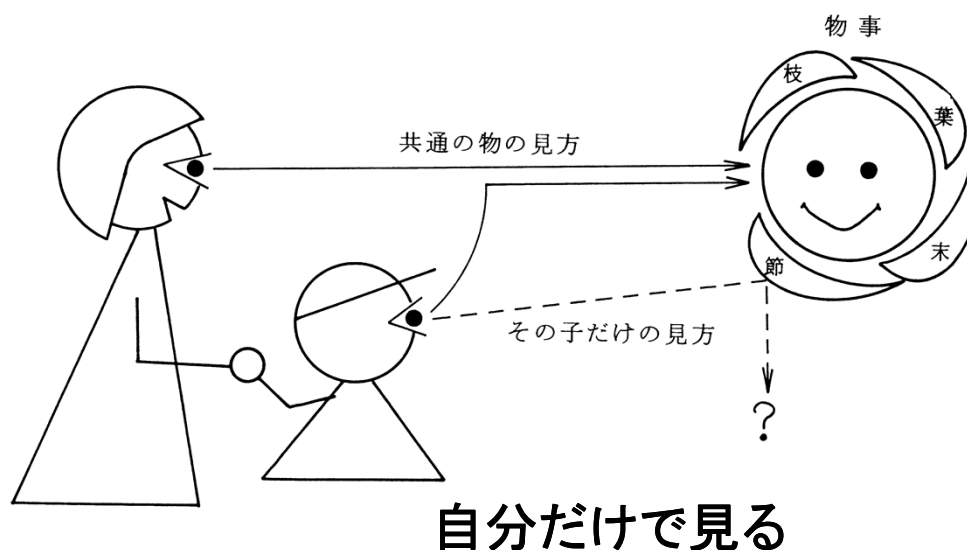
肯定的な言葉に変えてみよう!

- ☆ ○○君ワールドだね!
- ☆ 斬新な発想だね!
- ☆ ○○研究者だね!



体験の共有・共同注意

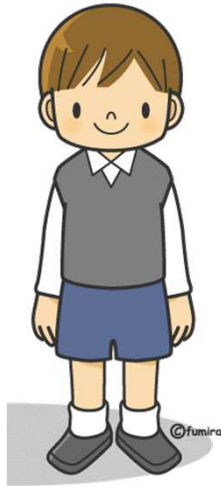
知的理解(物のあり方)および
情緒的評価(好感・嫌悪)



大人がこどもの視線に合わせることで感情を共有する。

その子に合った支援が必要なわけ

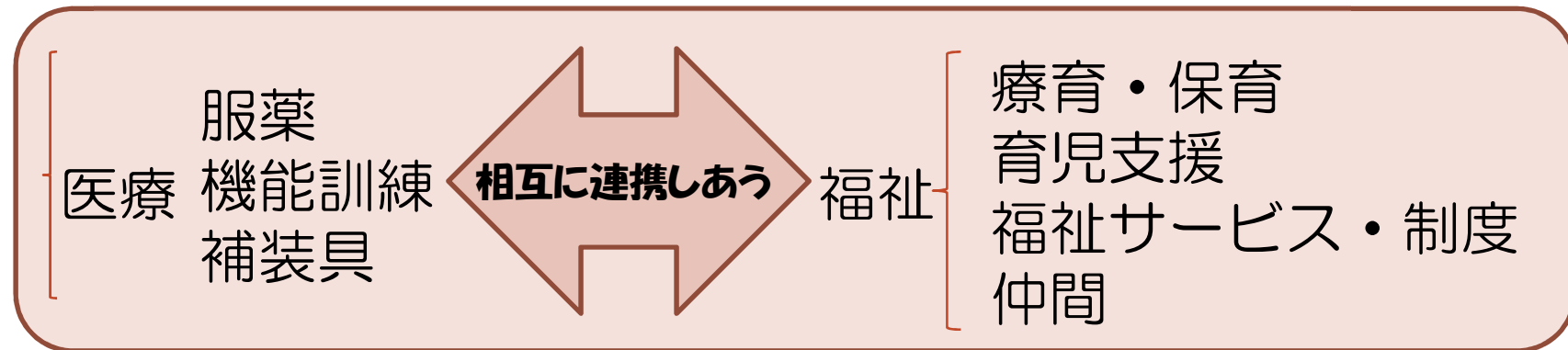
「〇〇君流」「〇〇さん流」が否定され続けると、自信がなくなり人と一緒にいることが苦痛に感じられるようになるようです。しかし、こども自身が苦痛と自覚できにくいいため、生活上、苦痛を表現するためにこども自身が困難な状況になることがあります。



支援のポイント

- ① 「〇〇君流」を認める
- ② 苦痛となっている環境を整理・整備する
- ③ 「こうやったらうまくいくよ」という真似しやすいモデルを示す
- ④ 行動や感情を周りが言葉で代替する
「〇〇になってるね」
「〇〇したかったね」
「くやしかったね」
「痛かったね」

肢体不自由（重症心身障害）のこども



生活・あそびの配慮と工夫

身体機能の障害がある場合、特に保護者においては機能訓練に重点をおいた関わりになることがありますので、“特別な子”という扱いにならないよう、しかし丁寧な関わりが必要になります。

環境への配慮も求められます。

しかし幼児期は特にあそびや生活の経験から、広い領域での発達が促されます。

補装具や日常生活に必要な用具を工夫することで「自分のペースでできる」事が意欲や発達につながっていきます。



- ①身体の構造や医療的知識
- ②安全で心地よい、まわりの様子がわかる環境
- ③こどもとしての生活リズム

基礎

応用

- ①まったく同じ形でなくても、その子なりの“同じ”を作り、仲間とのあそびができるようにしましょう
- ②年齢に応じた社会経験を体験しましょう
- ③こどもの小さなサインも大事なコミュニケーションであると捉え、選択肢や意味づけなどで豊かになるよう支援の工夫をしましょう

22

関わりのポイント

- ①こどもの表現をどのように受け止め、どのように返すかが、その子の育ちに大きく影響します。「その子を知ろう」とする気持ちが大事です。
- ②「できない」ではなく「どうだったらできるのか」を考えることが大切です。
- ③肢体不自由（重心）のこどもは障害が重複している場合が多いため、外界からの働きかけの受け止め方がこどもによって違ってきます。こどもの内面をよく知るためには、その子の医療的情報から得られる身体的特徴を知り、配慮や工夫を考えることが必要です。そのためにも関係する専門機関や専門職（医師・セラピストなど）との連携が不可欠です。

まとめ



「こどもの未来」に向けた支援を目指して

障害があるなしに関わらず、こどもとして、その年齢で経験するべき事は、環境を用意して経験できるような配慮をすること。

(ライフステージの中で考える)

その上で、さらに障害やこどもの特性に合わせた支援（合理的配慮）ができること。

キーワード

見通しある毎日を送る

十分に遊びきる

安心できる基地がある

認めてくれる大人がいる



生活リズム・健康

仲間がいる

葛藤がある

こどもが発達するために必要な要素

- I あそび(楽しく・友達と・色々な経験・一定の日課など)
- II 健康なからだ(食事・睡眠・排泄)
- III 安心できる環境(清潔でのびのびできる場所)
- IV 認めて受け止めてくれる人の存在